

元祿期の辭書界

岡田 希雄

元祿時代の辭書界を一瞥して見る。

が其の前に、元祿期とは何時から何時までを意味するかを決めてかゝらなければならぬ。此の場合に嚴密な事を云ふならば、將軍綱吉の在職中で、しかも元祿の年號の行はれて居た十六年間に指すと云ふことに成るだらうが、實際には斯う云ふ風に限定するものはあるまい。綱吉在職の天和・貞享・元祿・寶永を中心にした前後にして、上は家光の寛永時代に、下は吉宗の享保時代に接する期間を云ふのであり、漠然たるものを意味するのである事は、時代の區分の性質上已むを得ないであらう。しかし今は便宜上、天和・貞享・元祿・寶永の三十年間に限定する事にした。

さて何時の時代であつても、辭書界を觀察するには、辭書の著述及び刊行が主眼と成るのは云ふまでも無い。しかし其の時代よりも前に作られた辭書の流布、即ち發見・利用・轉寫・刊行及び研究も亦考慮せなければなるまい。さらに外國で出來た辭書の流布、即ち輸入・刊行及び研究も無視は出來ないのである。だが斯くは云つても、新しく作られた辭書を眼目とするのが普通なのだから、此の小篇に於いても、無論新辭書の著述と刊行とを主とする。

好學の將軍綱吉が居り、漢學が隆え、國學に於いては長流・契沖・季吟が出で、創作藝術の方面では西鶴・芭蕉・近松が其れ、文才を發揮した時代で、文藝復興期ではあつたが、辭書界は、決して、文運に平行して居たのであるとは云へないのである。が其れでも、いざ略述せうと成ると、さすがに僅少の紙頁では不足である。故に今はほんの一瞥を投げる程度に止める次第である。自分の見たものを挙げ、見ないものは省略する事とした。本の大きさは、美濃半切版以下は小本と記した。特に斷らないものは、半紙型又は美濃版である。

先づ百科辭書及び是れに類するものに就いて云へば、此の期では全く見る可きものが無い。特殊なものであるが人倫訓蒙圖彙七卷（撰者不詳、元祿三庚午年七月刊）は人倫を七類に大別し、更らに細類して圖示したもので、當時の世態を知る材料と成る。繪は蒔繪師源三郎筆と署名があるが疑はれて居る。何々訓蒙圖彙と名づくる一類のものは、寛文六年に中村楊齋の訓蒙圖彙二十卷が出て、其れが大いに行はれ出して以來、模倣書が簇出するのであるが、元祿期に武具訓蒙圖彙五卷（湯淺得之著、天和四年（貞享元年）正月白序、貞享元年三月刊、小本）、好色訓蒙圖彙三冊（無色軒三百居士撰、但し吉田半兵衛畫、貞享三年三月刊）、女用訓蒙圖彙五冊（吉田半兵衛畫、貞享四年）、立花訓蒙圖彙六卷（元祿八年菊月白序、同時刊）、能之訓蒙圖彙四冊（横小本、元祿十四年刊）などがあり、此の後、店土訓蒙圖彙、暗夜訓蒙圖彙、外科訓蒙圖彙、戲場訓蒙圖彙（しほ）などが出て居る。是れらの組織は様々だが大體は特殊百科辭書と云ふ可きである。楊齋の訓蒙圖彙は異版が三種出る位行はれたが、元祿八年乙亥年正月には頭書を加へ「雜類」を添へた（増補）訓蒙圖彙二十一卷八本が出て居る（此の後に寛政元年刊行の下河邊拾水の（増補）訓蒙圖彙大成二十一卷と成るのである）。さて是れらの訓蒙圖彙の類以外に、日用便覽的なものに大雜書類があり（元祿期には元祿八年五月刊行の萬世大雜書三卷、同

十一年四月刊の萬年大雜書二卷の如きがある、重寶記類（女重寶記五卷は、苗村丈伯の著で元祿五年八月の刊本だが、異版がある。武家重寶記五冊も丈伯著、元祿七年正月刊。男重寶記五冊も元祿六年のものであるやうだ）があるが、便覧とは云つても、辭書とは云ひかねる。

但し女重寶記卷五は「女節用集字つくし」である此の重寶記の類の出現や流行については、都の錦の元祿

太平記元祿十四年冬自序
十五年三月刊卷二「京と大阪に本替の沙汰」の條に「當世は只硬い書物を取置いて、あきないの勝手には、好色

本が重寶記の類が増じやといへば大阪本や仰ればさうじや、すでに大阪に於て、家内重寶記が出来始しより此かた、其類棟に滿ち、牛に汗する程あり、然れども此頃は、はや重寶記も末になり、萬寶に移る」と見える。其の萬寶と云ふのは萬寶某とあるものであらう。世俗要用の事を多く書いた貝原益軒の萬寶鄙事記四冊は寶永二年四月の自序があり、同月の刊行であるから、萬寶類としては後出のものである。百科辭書と見て支障が無い。さて此の期としては、右の如くに百科辭書としては優れたものは見ないが、寺島良安が其の和漢三才圖會の編纂に三十有餘年間努力したと云ふのは、此の元祿期のことである事を忘れてはならない。なほ節用集が此の期に於いて百科辭書化した事は、節用集のところで述べる。

部首分類漢和辭書としては、漢玉篇ワシケン即ち宋の大廣益會玉篇の附訓本や、和玉篇の時代ではあるが、すでに、畫引辭書として整備した梅唐祚の字彙が輸入せられ、翻刻書も數種出て居り、其れを模した純粹の畫數順辭書も承應二年五月刊行の字集便覽題義は九冊や、寛文四年五月刊行の袖珍和玉篇一冊などが出て居ることだから、玉篇の名を有する書が出るにしても——玉篇の名を有する漢和辭書ならば、明治に成つても出て居る——實質は字彙式辭書の時代である

(此の後、康熙字典が輸入せられると其の影響を受けた辭書の時代と成るのだが、其の康熙字典が組織と云ひ、各部首内の文字の配列と云ひ、全く字彙の模倣書である事は云ふまでも無い)。さて和玉篇の類としては増訓畫引和玉圖彙一冊(元祿六年正月、中村基之承榮成自序、同三月刊)がある。簡單なものだが上欄に説明用の圖を入れた點に特色がある。但し給の下の文字とは全く無關係である。これは訓蒙圖彙の模倣であらう。此の他和玉篇類があるが、其れらは省略しても特記すべきは、毛利貞齋の増續大廣益會玉篇大全十卷十二本である。元祿四年十二月の凡例があり五年の刊行だが、五年の刊本はまだ見ない、書名から見ると宋の會玉篇に近い組織であるかのやうに見えるが、實は然うで無く、組織は著者自ら云つて居る通り全く字彙式で、字註の漢文は、字彙のやうに冗雜で無く簡單で、會玉篇のまゝであり、收載文字は増續して居る。國語の假字註もあるから、假字註のみに絶る者にも、漢玉篇を使用出来るものにも向くので、此の書は大に行はれ、元祿五年の初刊以來何度も翻刻せられ明治三年本は六刻本である。他に秋田藩佐竹氏の明德館の藏版本もある。玉篇を畫引にしたものは大和田氣求の玉篇畫引十一冊、作者は不詳の増修玉篇十一冊があり、貞齋にも別に玉篇畫引韻附十一冊があるが(元祿五年の書目による)、増續した點に特色があるのだらう。著者は京で儒學を講じた人だが諺解式の書を書き、又辭書も元祿書目によると、玉篇畫引韻附十一冊、三重韻訂補二冊、字韻草鑑四重大成八冊、類字彙解八冊などを著して居るのである。しかし梅園堂郡の錦の元祿太平記卷六「日本の風にうつしてぞみる」の條に「小補韻會は字註くはしけれ共文字少し、字彙は常に用ゆべき物なれども、又文字の不足多し、假令字註は盡く共、字數をのせ、初心の求め易き字書はなきか。京首書字彙を左に置き、右に續字彙補をおかば、文字に事缺まじ、さりながら貧學にして、兩部の書を求め難ければ、頭書漢玉篇こそ、初學の字を引くためによりしく候。毛利貞齋の

集めらし書に、是程はやるは御座なく候」とある如くに、貞齋の代表作と云へば、此の増續大廣益會玉篇であつたのだ。同時に、漢和辭書としてよく行はれた點から云へば、徳川期中の代表作と云つても可いのである。

韻引辭書は、我が辭書史では貧弱な部門であり、平安朝の東宮切韻二十卷を尤なるものとし(但しこれは佚亡した)、鎌倉末から吉野朝期に、虎關の簡單な聚分韻略や海藏略韻が存する位で、徳川期に於いても作詩用の貧弱なものが出たに過ぎない。一體、韻書なるものは、支那本土では、發音の是正統一のためと、作詩文用との二つの目的で使用せられるのであり我が國に於いても、東宮切韻の時代に於いてはやはり此の二種の目的で使用した事であらうと考へられるが、次第に字音が日本化した結果、韻書により字音を正すと云ふことは、殆んど無意味と成り、専ら作詩文用のものと成つたと見なければならぬ。聚分韻略の如き簡單輕便なものが現はれ、大いに歡迎を受けたのも此の結果である。とにかく韻書は、日本人としては、特殊の目的以外には使用し難い辭書である事は否定できない。そこで、優れた韻書を作らうとする篤學も出ず、韻書と云へば簡單輕便貧弱なものと成つたのであり、徳川期に於いても、見る可きものが全く出なかつた譯である。さて徳川初期では、前代の聚分韻略が全盛ではあるが、其れの三段式に改められた三重韻が殊によく行はれ、種々手を加へたものが出て居る。室町期の刊本は聚分韻略も三重韻も共に無訓本であるが、徳川期のは假字註のある本である。(これは假名の音訓註のある方が便利であるから、自然に斯う云ふ假字註本も生れたのであつて、室町期刊本に假字註を施してある本を屢々見るのである。吉川文書には、吉川元長が、菩提寺西禪寺の周伯に、聚分韻略に假名をつける事を依頼した書狀が見える)此の種の韻書は種々のものが、夥しくあるけれど、内容上輕視して注意もして居ない。しかしたま／＼自分が備忘的に書きとめて居るものとしては、聚分韻略に頭書増補本一冊(元祿十丁丑年仲夏、齋藤熊谷山人)

自序、刊 三重韻に増修三重韻一冊小本、貞享三年不詳 丙寅歲仲夏刊 改正増補三重韻一冊元祿五年申年正月刊 洪武聚分韻九冊寶永二乙酉年正月刊 がある。増

益書籍目録の寶永六年本に三重韻を十五種舉げて居る中には元祿期以前のものもあるだらうが、流行を見るに足る。

都の錦の元祿太平記卷五「是から末は學問の道」の條に三重韻刊行の事について記事が見える。何かの参考に成らうと思ふから左に引いて置く。

夫四書五經を始め、大和書の戲草に至る迄、梓の數年に廣がり、已に吉野の山の櫻不も、切盡すかとあやまたる程に、すは見よ、黃楊版の三重韻發りしは、櫻が絶しゆへかと思へば、さにあらず、黃楊は卻て販賣櫻に五割増じやといふ、此版本、梅村氏、其昔三重韻を以て人に利を得しゆへ、其むくひのため、新に黃楊版を行ふ。筆工は當時の名人牧村伊六に筆垢をとらせ、壹丁を壹匁二分書に定め、僅なる寸珍の筆料三百匁に及ぶ。版壹枚のほり手間三十匁餘に至る、然れども此版成就せし年、入目残らず取戻し、續いて年々利を得、今に於て黃楊版を用ゐる事、西は對馬を限り、東は松島に及ぶ、夫故諸國に梅村を黃楊村と名附、其沙汰よろしく一を以て萬をしれといふ事誠なる哉。此三重韻の譽れあるゆへ、梅村版とさへいへば、世間におしなべ能き版ぞと思ふは、是彌白が才の賢きによる所ぞかし。此頃或人節用集を寸珍にして、首書を加へ、書禮を書入れ、土産節用と名附、一年程にして寫本出來侍り、是を黃楊版にせば、三重韻には倍して賣れんと思ひ、書林彼は望むといへども、黃楊の價になづみ、暫く日和を見合する事、梅村の器量に似たる人稀なる故なり、誠に梅村なくなりて黃楊版の道絶ぬと、世に歎く人多かり。

三重韻の賣行は想像も出來ぬ程であつたらしい。此の文には寸珍本土産節用の事が見えるが、此の「或人」と云ふのは、自家廣告の巧い元祿太平記の著者其の人であるやうな氣がする。三重韻と並んで行はれた簡易韻書に、以呂波韻と云ふがある。是れは、漢字に音訓を片假字で注し、又簡單な漢文註を施し、其の片假字の頭字により色葉に大別し、色葉の各部の中で、四聲により平仄に別ち、各頁の上段に平字、下段に仄を收め平字、仄字を更らに三重韻と同じやうに十二門分類した物で三重韻が一層日本化して便利と成つたと云へる。室町末には存したかと想像せられるが、此の

以呂波韻も徳川期ではよく行はれ増益伊呂波雜韻三卷一冊元祿七甲戌年四月刊 四聲以呂波韻大成三卷一冊元祿十七甲申歲正月刊 伊呂波略韻平仄大成一冊寶永七庚寅年五月刊 などがある。増益書籍目録の寶永六年本には九種が見える。さて斯う云ふ聚分韻略系統のもの以外に、漢和三五韻、又は和漢三五韻二冊貞享三丙寅年六月他序がある。同三年九月刊、小本 儒者宇都宮由的が、一條兼良の和訓押韻を増補したもので、漢和用のものである。韻引辭書として、組織の面白いのは、毛利香之丞(貞齋)の字韻早鑑四重大成十二卷である。元祿四年五月の刊行にかゝる。一頁を四段に別ち、平上去入を當てゝ居る。これは三重韻の三段組織を四段にしたものだから、「四重」の語を書名の中に入れて居るのである。文字の配別は各字の全畫數順だから、卷九で例を取ると、九畫の文字を平上去入により四段にならべ、各段の中は韻順とし、其の各文字の音訓を假字や漢文で註し用例や熟語をも併記すると云ふ體裁である。組織としては面白いが、韻を知らなければ引き得ないから、韻引辭書としての弱點は免れては居ない。

意義分類辭書としては、次期の伊藤東涯の名物六帖ほどの物は無いが、其れでも數種の書がある。大體漢語漢字が主である。齊東俗談七卷延寶七年の他序などがあり、貞享二乙丑正月刊、松浦默撰 は片假字文で解釋して居るが語數も少く、七卷と云つても分量は多く無い。疊字訓解三卷小本一冊、延寶九年(天和元年)春成、同四月刊 天は蒼々・昭々の如き疊辭を意義分類して片假字文で解釋したもの。邇言便蒙抄三卷天和元年仲冬自序、同二年二月刊 は天地人三才に象りて上中下三卷に別ち、其れを人體に擬して首卷・臍卷・足卷など、名づけ、平假字文で解釋して居る。邇言は俗言の義である。永井如瓶子の撰で美濃版の大ききだが、本書刊行後四年にして、貞享二年春殷春云々とあり、此の語義を知らぬ に菱川師宣の繪入りで出た小本の「故事難字訓蒙圖彙田處註解」とある五卷本(但し卷二は

無いから四冊本である)は、此の便蒙抄に手を加へて出した偽版で偽版だから著者の名も記さぬのである、書肆も無い。書名は訓蒙圖彙と云ふ名の書の流行した、め模倣したのであるのは勿論だ。享保十五年正月の後刷もある。次ぎに宮川正春の眠齋集和語對類五卷天和二壬戌年十一月は狂聯を嗜むもの、ための物だが、是れも全く同じ版本一部は減にて居る。寛政十年十二月に和訓部類抄三卷の名で賣り出されて居る。書言俗解六卷貞享二年四月他序、但は順庵門の榊原玄輔が支那の書言故事に倣ひて作つたもの、註は片假字で本書の如きは碩儒の啓蒙書として次ぎの和爾雅と共に注意すべきである。幼學類編五卷(貞享戊辰五年三月刊、附錄二冊は元祿二年正月刊)は自分の見た本は何れも無序跋無署名本であつたが元祿の書日には省庵作とある、説明は漢文。和爾雅八卷元祿元年九月自凡例は益軒の姪好古の撰、國書としては林羅山の多識編や中村楊齋の訓蒙圖彙も引用して居る。説明漢文。書名は和國の爾雅の義であり後の白石の東雅も同じ命名法に據つて居る。羅山も倭爾雅を作らうとした事が野子苞の俗語錄一卷寛文四年閏五月自序、元祿五年八月刊、分類は無いが辭書の類であるの林夕陽の序に見える。四附新編類字箋解八卷十二冊元祿四年辛未年八月刊、成稿の年時は見えすは、聚分韻略に従ひ漢字を先づ十二門に分類し、各門の中を更に色葉分類したもの、毛利香之丞即ち貞齋の著である。説明を助けるために、繪畫を挿入して居る點を注意すべきである。訓蒙圖彙や本草書以外の普通の辭書に説明繪を入れたものとしては、本書より古いものがあるか何うかを知らない。本書に次ぐものとしては元祿十一年刊行の經書字辨がある。さて本書は元文二己年六月に後刷本が出て居るが、雅俗難字類聚箋解と云ふ題箋であり、内題は類字以呂波韻大成と成つて居る。字盡重寶記綱目三卷小横本、洛東隱士某撰、寶年正月は書翰文を書くためのもので、やはり意義分類の中が色葉分類である。本書の如きは國語本位であるとも云ひ得る。下學集としては平假名註下學集三卷中村其之丞撰、貞享五年六月下旬刊がある。從來は漢文註であつたのを平假名字文に改

め、挿繪を加へた點に特色がある。さて伊藤東涯の名物六帖は正徳四年正月の自序あるものだから、恐らく、寶永頃には着手して居たことであらう。

以上は大體漢語漢字本位であるが、雅言古語本位のものとして、有賀長伯の和歌分類七卷元禄十一
戊寅四月刊がある。八雲御抄の言葉よせに倣ひて、歌語を意義分類し、例歌を挙げたもので、全く作歌用のものである。長伯は他に和歌八重垣や歌枕秋のねざめの如き辭書を書いて居る。

假字引國語辭書は、大體これを世間一般通用の語を蒐載した一般國語辭書と、古言雅語を集めた古語辭書とに分ち得る。そして、古言雅語辭書と云へば、語彙を假字書きしたもののが普通だが、一般國語辭書と成ると、古くは色葉字類抄、溫故知新書、節用集のやうに、漢字書きのものとして現はれて居たのだから、漢字書きのものと假字書きのものとの大別せなければならぬ。そして漢字書きのものは徳川期を通じて——明治に成りても——存するが、其れらは概して節用集の名を有するものであつたから、元禄期に於いても、色葉引一般國語辭書と云へば、すべて節用集である。

さて節用集類は色葉分類した上で、さらに意義分類したもので、慶長以前に天正本や饅頭屋本があり慶長に成つては易林本以來、多種多様に上木せられ、貞享・天和・元禄・寶永へかけても夥しく出た。節用集の研究家龜田次郎教授が展觀せられたもの、其の他自分の寓目したものを合せると、元禄期のものとして二十六種程あるが、これ以外になほあつた事は充分に想像できる。其れ等の中、丈伯の大益篆字節用集綱目六卷元禄三年四
月自序刊は篆字を入れた點に、

元祿四年の正月刊行の頭書大廣益節用集は上欄に繪を入れた點に、特色があり、元祿五年春の頭書増補節用集全は、附錄的なものを多くして、や、百科便覽的にした點に創意がある。此の節用集が百科便覽的性質を帯びる事は、元祿六年三月の大海節用和國寶藏以來、美濃版大本に於いては普通の事と成り、今後愈々其の百科便覽としての内容の豊富なものと成つて居り、地圖の點から云つても、元祿中のものよりは、三都や日本の地圖が添ふ事と成つた。しかし元祿期の節用集として特筆すべきは^{補増}和漢合類大節用集十卷十三冊である。書名は題箋では右の通りであるが、内題は和漢音釋書言字考節用集であり、自序の中では單に書言字考と云つて居る。言辭を先づ乾坤・時候・神祇・官位・人倫等十二門に別ち、各門の中を色葉分類したものであつて、色葉分類した上で意義分類をするのが特色である節用集としては組織が逆であり、むしろ意義分類辭書とも云ふ可きであるが、節用集の名を有して居るから、やはり節用集と見なければならぬ事は云ふまでも無い。此の組織の節用集としては、延寶八年八月刊行^{但し延寶四年八月自序}の合類節用集(別名「字林拾葉」)が最初であり、ついで貞享五年七月刊行の香取哲齋の蟹頭節用集がある。書名から云へば明らかに合類節用集の模倣である。著者は江戸の横島昭武で、本書が出来たのは漢文自序の口附たる「元祿歲次戊寅南呂階賞五葉」即ち元祿十一年八月であらう。ところが其の後、十年日の寶永五戊子年三月の京の大火で「凡例之首卷」が焼失し、其の爲めに「合記之書目、及時令節序甲子異稱之類」が闕如するに至り、凡例の首卷は補はずして、其の九年後の享保二丁酉年正月に京で開版したのであつた。稿本の一部が京都で焼失したと云ふのは、上木のため稿本が京都に來て居たからであらうか。明和文政萬延文久等の版もあるから、よく行はれた事を見るに足る。注文は字林拾葉同様に漢文であり、此の點では普通の節用集に比べると、遂かに高級であり、百科便覽的節用集や、簡單な節用集で満

足し得る連中には不向きであつたらうが、國語辭書と稱し得べきもので、内容が豊富であるものと云へば、徳川期を通じて是れ一つしか無かつたと云つてよいのだから——五、六十年後に和訓栞も刊行せられはじめたが、其れは本書に比べると一層高級であり、五十音順であると云ふ事も當時としては不便であり、刊行も數回にわたつての事であり、とにかく一般的では無い——本書が行はれたのも尤ものである。しかし下らない節用集が汗牛充棟に出たのに比べると、本書の流布は寧ろ貧弱であつたと云ふ可きである。なほ本書は天保六年と同十二年との二度に、ジイボルトやホフマンが其れ／＼本書を翻譯したと云ふが、其れも本書が普通國語辭書としての代表と認められて居たからである。節用集は右の通りに色葉分類と意義分類とを兼ねたものだが、是れらに對して單なる色葉分類辭書を一類とせなければならぬ。これは室町期の口我色葉字や運歩色葉集の類であるが、此の種のもは徳川期には見ないやうである。(明治には魁本大字類苑がある)。檢索に 便だから作られなかつたのだらう(口我色葉字、運歩色葉集、魁本大字類苑はそれと云へない)。しかし乍ら漢語本位のものが一つ存するから、便宜上こゝへ舉げておく。それは熟字便覽七卷元祿戊寅二月他序、同十である。熟語や成句を最初の文字の字音の語頭音で色葉分類し、其の解を片假字文で示したもの、童蒙用のものである。署名は無いが他序によると梅隱と云ふ人の著である。

色葉引古言辭書としては特筆すべきものが存する。それは荒木田盛員の鸚鵡抄百卷(別に目錄、引用書目各一卷あり、計百二冊)である。盛員の父盛徴は伊勢内宮の祠官で、色葉順假字遣辭書としての類字假名遣七卷を選んだ人だが、此の人が鸚鵡抄と名づける辭書を作つたところ、寛文十年の火で焼けたので、子が父の志を繼いで、寛文十三年二月より十二年餘りかゝり

て、貞享二年四月に完成したのが現存の鸚鵡抄である。和訓栞なみに普通國語辭書と見る人もあるが、何と云つても雅言的であるから、古言辭書の中へ入れて可らう。語の第二言までも色葉順にして居るのは類字假名遣同様だが、恐らくはもとの鸚鵡抄がやはり此の體裁であつたのだらう。此の書靈元上皇も御覽に成り、世の至寶なりと仰せられたので世寶鸚鵡抄とも呼ぶやうに成つた。收載語數二萬二千八百六十言、百卷の大著であるから、和訓栞・雅言集覽・俚言集覽と共に徳川期の四大國語辭書と云ふ可きだ。但し寫本であり、しかも祕書として流布せなかつたから、辭書としての實用的價值は皆無であらう。盛員の原本は今松井簡治博士が祕藏せられ、自分も一部を見せて頂いた事がある。平假名字の美寫本であつた。收載語は大體雅言古言であつたと記憶して居るから、國語の普通辭書として扱はないのである(保科氏は言海文獻集で、和訓栞と同じく、一般國語辭書であると記して居られる)。次ぎに河瀬菅雄の「まさな草」元禄三庚午年八月刊は作歌用の言葉よせであり、有賀長伯の和歌八重垣七卷は作歌用の手引入門書であり、辭書では無いが、第四卷以下の四卷は、歌語の色葉辭典である。元禄十三庚辰歳季陽の自序があり、四月の刊行であるが、後刷も改刻本もある。吉田重貞の「詞林山の井」は歌語の色葉辭書であつて、下卷末に元禄五年夏五月の年月日がある。上中下三卷に補國一卷計四卷のものだが、現存の著者自筆本は中卷が失はれて居る弘文莊待賢古書目第五號。次ぎに契沖の門人海北若冲が和訓類林七卷を作つた時期は不明であるが、赤堀氏は寶永二年三月十日成ると云つて居られる。古事記、六國史、萬葉集、延喜式、和名抄、文選、遊仙窟ら二十九部の書の、本來ある訓註や、後人の加へた訓註を蒐集して色葉分類したもので、訓は眞假字で記して居る。第七卷には和訓指掌略が添うて居るが、これは日本書紀の語を舉げて、片假字で傍訓を施したもの、類林には人名地名姓氏は除いて居るが、指掌略には其れらをも收載して居る。

る。さて此の二書は共に署名も無いものだが、伴蒿蹊は若冲が師の遺意を繼いで作つたと記して居る。從來は刊本が無かつたが、最近に古典全集本が出来、次いで三ヶ尻氏の謄寫版本も出た。後者には和訓指掌略を除いて居るが、新に漢字索引を添へた點は結構である。次ぎに色葉分類古語辭書として簡單なもの乍ら、異色あるものに「大和詞」の分類がある。「やまとことば」と云ふのは普通は日本固有の語の義で、主として中古の雅言を云ふやうであるが、今云ふのは其れら以外のもの、即ち平安朝の歌學書に見える異名や、莫傳抄・藏玉集などに見える怪しい異名に類する特殊語も含められて居り、此の種のもは淨瑠璃十二段草子の第九段にも「やまとことば」とあり、用例が見える。使用する場合は戀愛の會話や懸想文に限られて居るやうで、婉曲に云ふために、斯う云ふ言葉を使うものらしい。しかして斯う云ふ言葉は、戀するにも、戀愛物語を読むにも知つて置く必要があつたために、其の大和詞を集めた簡單な單行書も出來た。其れが即ち大和詞と云ふ書である。はじめは言葉を秩序も無く集めたに過ぎないものであつたが、必要にせまられて色葉分類とも成つた。そして遅くとも延寶九年には色葉分類と成つて居る。さて斯う云ふ大和詞の分類は徳川末期までに、感心する程様々なものが出て居るが、元祿期には大和詞祕註四卷合一冊天和元年十月成る、元文三年十一月版は再刻本が、大和歌詞二冊寶永二乙酉年四月刊、小本がある。しかし實際は僅かこれ位の事では無かつたらうと考へられる。女重寶記にも卷五に新大和言葉の部がある。

色葉分類辭書は、現存のものでは色葉字類抄までも遡り得、參語集の言に誤謬無しとすればさらに延長中に示寂せられた眞寂法親王の梵漢雙對集まで遡り得るが、色葉字類抄を最古としても、元祿期までには五百四五十年の歴史が

あり、徳川期中では甚だしく優勢にて、假字引辭書と云へば色葉辭書である。これに比べると五十音辭書の勢力は微々たるもので、其の出現は現存のものについて云へば、心空の法華經音義(貞治四年のものか)が最古であらう。此の後、文明十六年六月には、大伴廣某の堂々たる溫故知新書三卷が出来、徳川期に入りて快倫の法華經文字聲韻音調篇集三卷慶長十三年稿、同十八年三月木活刊がある。初辭通韻一卷寫本は合綴せられて居る類字韻と同時に作られたものとすると、慶長以前には遇れないやうだ、此の後空哲の佛書索引とも云ふ可き因陀羅網十五卷寛文乙巳五年七月刊が存するのだが、とにかく五十音分類の辭書や辭書に準すべきものは、色葉分類辭書に比べると極めて乏しいのであるが、元祿期には其れが一つ存する。其れは倭字一卷である。日本書紀の用語の中訓註あるものを訓註と共に列舉し、その訓註により五十音分類したものであつて、紀の和訓索引とも云ふ可きで、全く若冲の和訓類林や和訓指掌略に類似したものである。學術上の絶對價值は決して豊富であるとは云へず、分量から云つても三十丁のもので片々たるものであるが、色葉分類で無く、五十音分類(但し其れも排列はアカサタナハマワラヤである)である點に、歴史的價值を認めなければならぬ。著者や成稿年月は自序に「元祿改元之冬 從五位下鴨長尋」とあるから明瞭だが、其の鴨長尋の傳は判らぬ何れ下鴨あつた濱野知三郎氏の御所藏本を拜見したのだが、著者自筆本であるやうだ。とにかく、片々たるものながら、五十音分類であるのと、和訓類林や和訓指掌略と似たものである點に興味がある。模倣關係のある事が判明すれば一層面白いのだが、確める事はできない。

俚言片言辭書と云ふと、世俗日常の語や其の中の片言詛言の辭書を云ふのであつて、後の所謂俚言集覽の一種であ

るが、俚言集覽に諺語を収載して居ると同じく、此の種の書にはやゝもすると諺語辭書の色彩の濃いものもあり、内容から云ふと雜駁であり勝ちである。さて此の種の辭書は、安原貞室の「かたこと」五冊慶安三年十月下旬成る、其の頃の刊なるべし、後半が辭書體の亞流と云ふべきもので、貞享五年二月には浮世鏡五冊が出て居る。此の書、第一第二の兩冊は世態風俗や片言に關する著者の意見を述べたもので辭書式では無いが、第三・五の兩冊は意義分類式である、第四冊は缺本だから不明だが、これも三・四の兩冊より類推すれば恐らく辭書式であらう。續いて元祿八亥年九月には世語重寶記五冊が出た。「世話」の語は、世上通用の語と云ふやうな意味である。俗語や俚諺を色葉分類したもので、これは立派に辭書體である。和文序はあるが署名も年月日も見えない。此の世語重寶記は後刷本として延享五戊辰年正月の俗語故事談と成つて居る。さてこれらの片言亞流書よりも後れて出て、後出書なるが故によく纏つて居り、又大部でもあるのは、貝原好古の諺草七卷十本である。好古はすでに和爾雅を著はし其れは刊本として世に行はれて居たが、今また其の姉妹書として本書を書いたのである。元祿十二年の秋か冬頃に出來たものらしく、翌十三年四月に三十七歳で歿して居る。刊行は元祿十四年辛巳春正月であつた。色葉分類の辭書であるが、各部のはじめに於いて「諺」と標して俚諺をあけて其れを註釋し、次ぎに「俗語」と標して世上で普通に使用する漢語や國語を擧げて解釋し、最後に「正語」と標して、片言訛語を訂正して居る。斯くの如くに、諺が色葉各部の最初にあるから、其れに因んで書名を諺草と定めたのであつて、書名は内容にふさはしいとは云へないのである。當時は世諺の出所を記し其の意義を解釋したもの、世上の俗語を解釋したもの、片言の訂正を教へる書などが、かなりに出て居つたので、其れらを集大成し、補訂したのが本書である。好古にはなほ和漢事始の著もあるが、事始辭書の條で説く。さて此の外、元祿十二卯歲九月に遊園といふ人

が作つて其の子供に與へた自筆本に世話字考一冊がある。世上通用の語即ち「世話」に如何なる漢字を當てる可きであるかを示したもので、時に略註も施して居る。諺草の「俗語」に當るものと云ふ可きだが、大和詞の類にも卷尾にも世話字盡と云ふのが附載せられて居る。當時は此の類の語を「世話」と稱したのである。俳言書たる世話盡(せわ焼草)の世話もこれである。此の世話字考に「ディウス^{切利支丹} バテレン」と云ふやうな事も見えるのは假名字例や、倭字古今通例全書に「ぜず耶蘇」があるのと同様に、解しかねることである。

連歌俳諧に詠む事物や言葉を類聚したものは連俳辭書と名づける。連歌用のものは、和歌用語辭典としての色彩もあり、同時に俳言辭典的であるのは云ふまでも無い。さて連俳辭書には色葉分類のもの(例へば御傘^{ゴサン}・久流留^{クリュウ}の類)、

四季順のもの(例へば滑稽雜談・年浪草の類)、意義分類のもの(例へば世話盡・藻鹽草の類)とがある。さて色葉辭書としては、俳諧小からかさ小本一冊^{元祿四年十一月他序}は元隣門の坂上松春の撰、貞徳の御傘の亞流書、萩の葉(又、しな

り萩)二卷^{小本、元祿五年五月序}は中堀億庵の撰、産衣七卷三冊^{小本、元祿十一年}は著者を記さぬ。絲屑四卷二冊^{小本、元祿}

序、同七^{年三月刊}は轍士の撰、色葉分類をさらに意義分類して居り、京町盡があるなど、節用集風である。次ぎに四季順のもの

は、所謂歳時記で、眞の季寄であるが、はなひ草のやうに色葉分が主で、「四季之詞」が附録的になするものでは無くて、専ら四季の詞を集めた單行本を云ふのだが、此の期には貧弱なものや、只原好古の歳時記の類は存するが、これと云ふ程のものは無い。次ぎに意義分類體のものは、寛文九年正月刊行の藻鹽草十冊の如きは注意すべきだが、元祿

期としては摺火打一冊^{如泉撰、小本}があるだけのことである。これは意義分類した上でさらに色葉分類もして居る。

總體に連俳辭書は色葉分類のものは元祿期頃までに、大部で注意すべきものが現はれ、四季分類のものは、中期以後に大部のものがあるが、意義分類のものは一番組織も不完全で見える可きものが無い。しかも、連俳辭書は特別なものを除くと、大體が手輕を主としたものであるから、辭書として見た場合には、貧弱である。それで元祿期に於いても色葉分類のものを除くと、辭書として見る可きものが、殆んど無いのである。

假字遣を説く事は、語例を列擧するのが普通であるが、其の語例が豊富に成ると、何うしても何かの標準で分類排列せなければならぬ事と成り、分類の方法によりては辭書體と成るから、従つて假字遣辭書と稱しうるのである。

さて色葉分類假字遣辭書としては、赤堀氏の國書解題に見える林永喜假字遣書が最初のものらしく、刊本としては荒

木田盛徴の類字假名遣七卷萬治三年秋頃成
寛文六年九月刊、横小本が最初であるらしく、其の後山崎吉里(橘成員)の假名字例四卷延寶六
年二月

刊、色葉分類の各部のがある。元祿期のものとしては初心假名遣一卷小本、撰者不詳、元祿四
年春自序、八月上旬刊は天地・時節・家屋・國名と

云ふ風に三十二門分類で、最後の言語門は色葉分類と成つて居る。假字遣の書であり、片言直しの書では無いが、片

言直しの色彩もあり、本書によりて當時に於ける片言化した發音を知る事も出来る。定家假字遣式の書で誤は多いが、讀んで面白い書である。さて元祿八年九月には契沖の和字正濫抄五卷が刊行せられて居て、これも辭書的ではあ

るが、かなり複雑であるから、辭書と見る事は控へて置く。此の歴史的假名遣を主張する正濫抄を反駁する立場で

書かれた倭字古今通例全書八卷四冊元祿八年七月自序
同 九年八月刊は假名字例と同じく橘成員の著であるから、其の辭書としての組

織は全く假名字例と同じである。さて正濫抄の刊行せられた元祿八年に、正濫抄より少し早く三月に刊行せられたもの

に注意すべき假字遺辭書がある。其れは「しづつ假名文字遺蜺縮涼鼓集」二巻である。内題にはカンナモジヅカヒケン シュクリヤウコシフと片假字で傍訓が施してある。書名の示す如くに、ジヂズヅの書き分けを説いた書物で、シジミ・チヂミ、スヅミ・ツヅミの四語でジヂズヅ假字遣を代表せしめて、蜺縮涼鼓集と云ふ名を與へたのである。ジヂズヅの混同が文化や政治の中心部に於いて、何時頃より生じたかは言明できないが、室町中期頃より、特殊な語に於いて現はれ出し、慶長期に入りて愈々烈しく成り、元祿期の京都では全く其の區別は出来なくなつて居たものゝ如くである。しかしてジヂズヅの混同が生じると、定家假字遣によつて、假字遣に意識するやうに教養せられて居た智識階級人は、定家假字遣には見えぬジヂズヅ假字遣にも注意するに至るは當然のことと、そこで室町末のものと考へられる行能卿假名遣や、西三條實條の假名遣近道、又慶長九年閏八月二十七日書寫の假名文字遣の附録の如きものにも、此の方面の注意が見え、類字假名遣・初心假名遣・和字正濫抄なども、關心を示すやうに成つたのだが、其の初心假名遣や和字正濫抄と時を同じくして出た蜺縮涼鼓集が、ジヂズヅ假字遣のみを問題として居るのは、むしろ感心すべきである(此の種のもは、あとにもさきにも本書二つあるのみである)。色葉分類であるが、語例は當時の發音を知り生きた材料である。元祿第八歲次乙亥二月朔の和文自序の署名は「鴨東蘇父書于賓饒堂之西軒」と成て居るがこれは號とは云へまい。鴨東に住んで居た人であつた事が判るに過ぎぬ、書肆も三條繩手の伊勢屋清兵衛である。本書の著者は倭韻字會、扶桑切韻と云ふやうな書も作つて居たやうであるから相當の人であつたらう、地方人であるらしい口吻は無い、京都人であつたやうだ。して見ると何によつて、ジヂズヅの假字遣を定めたか、疑問と成るが、著者は此の點については全く説明して居ない。時にはジヂズヅを決定して居ないものもあり、誤もある。だがとにかく、斯

う云ふ特殊の假字遣に注意して居るのは感心で、其の學說も全般的に見て價值がある。著者が師授口傳を排斥して居る點も、江戸の橘成員とは正反對で面白い。さて本書は享保二十年八月の求版本では假名文字遣便蒙抄と云ふ内容と無關係の平凡な書名と成り、序文も享保二十年乙卯十二月と改めて居るのは例によつて例の如き書肆の奸策とは云ひ乍らも、怪しからぬ事である。

語原研究の書も語彙の解釋が主眼と成るから、やはり假字分類又は意義分類の辭書體と成るのが普通であり、鎌倉期建治元年には名語記十帖と云ふやうな整然たる組織の色葉分類語原辭書も生れたのであつた。その後はこれと云ふ程のものは無くて徳川期に及んで居るが、さて元祿期の色葉分類語原辭書としては「和語のしるべ」六卷横小本が元祿九年八月に刊行せられて居り、作者は承應二年に死んだ松永貞徳であつて、舉堂の序文によると貞徳の遺稿を此の時にはじめて上木したやうに見えるが、實は書肆の——舉堂が事情を知らぬ筈は無いと思ふ、知り乍ら利を以て誘はれたと見るから、書肆と同罪である——奸策であり、寛文二年五月の刊本である「和句解」の書名を改め、盤齋の序分を除き、舉堂の序文を添へて出したものであるに過ぎない。従つて和句解の流布史から見て注意するに足ると云ふ程度のものである。さて此の期の語原辭書として舉ぐ可きは貞原益軒の日本釋名三卷六冊又は三冊である。元祿十二年正月十五日の自序があり、十三年の刊行である。後漢の劉勰の釋名に倣うたから日本釋名と云ふのであつて、(此の命名は、益軒の姪の好古の和爾雅と同じである)意義分類體語原辭書である。卷頭に凡例が六丁あつて、語原語釋の方針を示して居るが、此の點は、斯う云ふもの、無い和句解よりも進んで居るのは事實だが、建治元年の名語記十帖にも

學說

融的

初井

能に

相異

から

り云

意義

の枕

は最

可さ

やは

昌琢

分類

昌琢

すでに總論の一帖が存したのであるから、體裁としては、惑心するにも及ばぬ事である。其の語原説は簡單で云ひ足らぬ點はあるが、積極的に非難する點も無いけれど、さて實際の解釋は何うかと云ふと、無論常識的語原解釋と成つてしまつて居る、しかしこれは當時としては已むを得ない事である。但し、丁度二十年の後には新井白石の東雅二十卷が出来て居るが、語原説に於いても、實際の解釋に於いても、又量に於いても、日本釋名は東雅に比べると、ずつと見劣りがする。これは二十年の時代の相異に基くと見る可きでは無く、益軒と白石との學術の相異に據るのだと解すべきであらう。だが徳川期の語原辭書としては、此の後に出了たものにも優れたものは無いのだから、やはり東雅につぐものとして重視すべきであらう(和句解は日本釋名につぐと云ふ可きだらう)。それでも量から云へば、建治の名語記十帖には劣るのである。

枕詞辭典としては契沖の詞草正採抄一卷貞享四年三月白がある。枕詞を其れを受ける言葉により意義分類して解釋し用法を示したもので、歌を詠む場合には便利である。枕詞を集めた刊本としてすでに下河邊長流の枕詞燭明抄寛文十一年版が出て居るが、これは無秩序であつたから、契沖の書は組織に於いて優れて居る。現存のものでは最古の枕詞辭典であらうから、歴史的價值を無視できない。流石に契沖は斯う云ふ點でも獨創的であつたといつて可さうである。

歌に詠み込む地名、即ち歌枕を集めて、例歌を示し、或いは地理的説明を施したりしたものはやはり其の分類如何によりて辭書と成る。此の種の歌枕辭書として現存最古のものは藤原範兼の五代集歌枕二卷山・嶺・岳・隈・袖・坂と云ふ類の分類。從來上卷が知られて居たが、下巻で、量が多いものは澄月の歌枕名寄三十八卷 同分である。徳川期に成ると里村昌琢の類字名所和歌も存するのであつた。

集七卷 元和三年成、活字版、整版などあり

六字堂宗恵の松葉名所和歌集十五冊

寛治三年八月成の如き色葉分類本が出て居るが、元祿期に寛文七年正月刊

は、色葉分類の名所小鏡一冊 撰者不詳、貞享二年三月刊、小本

袖珍歌枕八冊

撰者不詳、元祿三年九月刊、小本

契沖が類字名所和歌集を補訂した類字

名所補翼抄(勝地一覽) 寫八卷、元祿十年四月十日成、全集に入る

類字名所外集

寫七卷、元祿十一年十一月十七日成

の如きがあり、山・嶺・川・海と云ふ類

の意義分類のものでは有賀長伯の歌枕秋の寢覺一卷

元祿五年刊

世外子の増補名所部類考一卷 寶永六年二月申旬白序刊、小の如きがある

契沖のは學術的な著であるが他は作歌用の簡單なものである。此の中、長伯の秋の寢覺は長伯に代り欲賀光清が増補

した増補本 正徳四年八月刊

甲斐の萩原元克が手を加へた増補訂正本 弘化三年秋成、其の頃の刊、横小本

などがあり、増補本にも二版以上ある

らしく、とにかくよく行はれたものであるらしい事は、古書即賣會や古書の日録でさらに見受けるのによりて判る。

元祿期以後にも此の種のもものは澤山出て居るが、此の寢覺が最もよく流布した事を認めて可いやうだ。

源氏物語や萬葉集のやうな特定の書の辭書は、徳川期に數多く出来て居るが、此の期のものとしては源氏の方に契

沖の源偶篇一卷

貞享二年三月成、全集に入る

がある、源氏中の語句を色葉分類し、さらに卷の順に並べたものである。これに少し手

を加へて刊行したものが源氏大和詞一冊(また源氏大和言葉卷、源氏大和言葉大成) 元祿九年刊

である。書名に大和詞の註

があるのは、例の大和詞の類がよく行はれて居つたから其の影響を受けたのであらう。さて萬葉集の方では契沖門人

若沖の萬葉集類林十五卷

全集に入る

がある、用語を意義分類した上でさらに色葉分類して解釋したものであるが、作つた

年代は元祿期であるか、其れよりも後であるかは判らぬ、便宜上こゝへ舉げておく。若沖には萬葉集作主履歷九卷

製作年不詳があるが、これも見様によると、身分により分類した辭書であるとも云へる。

金言・金句・格言・名句・故事・譬喻・俚諺と云ふ類は、大體似たものだから、これを大ざつばに一類に見る事は可能である。しかして斯う云ふものを或ひは蒐集し、或ひは解釋したものであつて、しかも何かの標準で分類せられて居る場合には、金句俚諺辭書と云ふ事も出来る。しかして此の種のもものは菅原爲長の管蠡鈔、禪林の句雙紙類、吉利支丹版の金句集などがあるが、徳川期に成ると、金句・俚諺を集めたものは多く成つた。片言や其の亞流書(世話重寶記、諺草の類)は大體或る程度に、俚諺を蒐載して居り、齊東俗談の如きも「世諺」の部があり、一方俳諧の方の書に於いても重類の毛吹草五冊寛永十五年一月自序、正保二年二月刊の卷二の「世話付古語」や空願の世話盡(せわ焼草)五冊明暦二年の卷二の「曳言之話」の如きもあるが、元祿期のものとしては、宮川道達の訓蒙要言故事十卷元祿七年四月他序、同、年三月刊は漢籍所見の故事要言を、漢文のまゝで意義分類式に類聚し片假字文で註解したもの、白梅園の和漢故事要言五卷一本寛永二年夏刊、元祿五年正月刊、年五は色葉分類で、片假字で解して居る。句雙紙の類には禪林雜句一冊貞享五年(元祿元年)成、同時刊、宗門葛藤集七卷四冊元祿五年正月刊、片假字淨土句雙紙(一名「會林說話」)六卷増上寺の會林の撰、貞享二年乙丑、九月自跋、元祿八乙亥年四月刊がある。なほ辭書體では無いが、俗諺を集めて道學的に解したものとしては、葉峯(仲允父)の野語述説補遺一冊貞享元年九月刊、諺の数二十條、本文十五丁、後編上下合一冊諺五十一條、無刊記、續編上下合一冊諺三十二條、無刊記、外編一冊諺十三條、貞享四年五月刊、他跋、元祿五年九月刊がある。益軒の和漢古諺二卷寶永三丙戌五月吉日自跋も辭書體では無い。

操觚字訣・虛字解・實字解・譯文須知の類は、たゞ單に漢字の意義を説いたものでは無く、詩文を正しく理解し、

さらに正しく作らんとする目的に叶ふやうに纏めた書であるから、これを用字格辭書と稱することができるであらう。しかし、是れらの書と全く性質が同じであるとは云へないが、かなりに似たもので、極めて簡單なものが元祿期に出て居る。詩文重寶記袖珍本一冊であつて、元祿七甲戌年六月の編衣子の自序があり、其の時の刊行である。國語を色葉順にあけて其れに相當する漢字を一字乃至數字舉げて、其の意義を簡單に註したもので、袖珍本の貧弱な極めて程度の低いものではあるが、用字格辭書の中に入れて可からう。重寶記と云ふ書名は重寶記流行の折柄である故に、斯く命名せられたのである。此の亞流書に増補詩文重寶記一冊袖珍本、享保十八年五月刊がある。

字書と云へば説文や六書故の如きを除けば、普通は楷書體を取り扱ふものだが、特殊なものとして、隸書や行草書を類聚したものもある。例へば六書通、漢隸字源、隸辨、草子彙と云ふ類のものだが、是れらや是れに準すべきものは字形辭書又は書體辭書字體辭書と稱して可からう。徳川期においては簡單なものや、大部なものやがかなりに出て居るが、元祿期のものとしては水戸家の草露貫珠二十二卷がある。中村義竹は書を以て水戸家に仕へて居たので、梅里公光岡が、草書の辭書を編纂せしめたのであるが、諸門人を集めて纂集したけれど、未完成で歿したので、さらに門人岡谷義端が命を繼承して完成したのである。「漢魏以來帝王大臣凡七百四十有一人」の墨跡を集めたのであつて、其れらの人々の名は「歷朝人名」に刻記してあるが、朝鮮人も居る。草書韻會、草書要領や、法帖の類から筆跡を蒐集し、楷書により字彙式の畫引辭書としたもの、眞字總計六千七十字、草字四萬九千五百字とあるから、眞字一字に草書八字の平均である。本文二十一卷、他に凡例歷朝人名などの一卷がある。元祿九丙子年四月の他序があり、寶永二

邦の名数を加へたもので、十五門分類と成つて居る。恐らくは名数の專書としては最初のものであらう。益軒はこれの刊行前に續編の選述に着手した、それが續和漢名數三卷で元祿五年正月他序元祿八乙亥年四月の刊行である。此の貝原の二書はよく行はれ、再刻本もあるが袖珍本も出て居る。但し袖珍本は山中正利や上田元周の著と成つて居り偽版らしく見える。此の後拾遺和漢名數も出るし、袖珍本系統のものも數版出來、名數書は種類が豊富に成るが、其は全く益軒の書がよく行はれたからの事である。

社會百般の事物の起原濫觴を記した書は支那には隋の謝吳の物始十卷、唐の劉孝孫の事始三卷などをはじめとして作られて居るが(不傳)本邦にも此の種のは平安朝期頃には存したらしい。ところで此の種のものが、何らかの標準で分類せられると、事物起原辭書、事始辭書と呼び得る。徳川期に成ると由來物語五冊小龜益英作、寛文九年四月刊の如き繪入假

字草子體のものも出たが頭數も少く無秩序である漢事始の凡例によると、他にも事始の書は存したのであつた。其れらの中には辭書體のものもあつたらう。しかして元祿期に成ると、事始辭書の代表とも云ふ可き貝原好古の和漢事始が出て居る。新編「漢事始」ナックワッ〔内題は中華事始〕六卷三冊と「新編和事始」〔内題は大和事始〕六卷三冊とであるが此の二書で一部と成

つて居る。漢事始は天和二年九月の凡例があり、此の方がさきに出來、和事始は後に出來たのである。凡例の日附は天和三年正月であり、中華方始がさきに完成した事を述べて居る漢事始には元祿九年九月の自跋があり、和事始には元祿十年四月の松下見林序がある。元祿十年夏五月の刊行である。組織は兩事始ともに天地・人倫・歳時と云ふやうな意義分類であるが、和事始にある神事門が漢事始には無い。此の一門だけの相異がある。説明は共に平假字文で全く啓蒙用の書である。漢事始の凡例による

邦の名数を加へたもので、十五門分類と成つて居る。恐らくは名数の專書としては最初のものであらう。益軒はこれの刊行前に續編の選述に着手した、それが續和漢名数三卷で元祿五年正月他序元祿八乙亥年四月の刊行である。此の貝原の二書はよく行はれ、再刻本もあるが袖珍本も出て居る。但し袖珍本は山中正利や上田元周の著と成つて居り偽版らしく見える。此の後拾遺和漢名数も出るし、袖珍本系統のものも数版出来、名数書は種類が豊富に成るが、其は全く益軒の書がよく行はれたからの事である。

社會百般の事物の起原濫觴を記した書は支那には隋の謝昊の物始十卷、唐の劉孝孫の事始三卷などをはじめとして作られて居るが（不傳）本邦にも此の種のは平安朝期頃には存したらしい。ところで此の種のもものが、何らかの標準で分類せられると、事物起原辭書、事始辭書と呼び得る。徳川期に成ると由來物語五冊小龜益英作、寛文九年四月刊の如き繪入假字草子體のものも出たが項数も少く無秩序である漢事始の凡例によると、他にも事始の書は存したのであつた。其れらの中には辭書體のものもあつたらう。しかして元祿期に成ると、事始辭書の代表とも云ふ可き貝原好古の和漢事始が出て居る。「新編漢事始」（内題は中華事始）六卷三冊と「新編和事始」（内題は大和事始）六卷三冊とであるが此の二書で一部と成つて居る。漢事始は天和二年九月の凡例があり、此の方がさきに出来、和事始は後に出来たのである。凡例の日附は天和三年正月であり、中華方始がさきに完成した事を述べて居る漢事始には元祿九年九月の自跋があり、和事始には元祿十年四月の松下見林序がある。元祿十年夏五月の刊行である。組織は兩事始ともに天地・人倫・歳時と云ふやうな意義分類であるが、和事始にある神事門が漢事始には無い。此の一門だけの相異がある。説明は共に平假字文で全く啓蒙用の書である。漢事始の凡例による

と京童のもてあそぶ事始の書は刊本が存するが、其の説無稽荒誕だから童蒙のため此の書を書いたとある。天和二年は好古の十九歳・二十歳の時である。好古は別に和爾雅や諺草のやうな啓蒙書をも書いて、三十七歳で死ぬに當り、經翼俗解の類を完成もせず、雜篇を編次した事に關し識者の誹議を受くる事を恐れて居るが、むしろ其の伯父で養父たる益軒の學風を繼いだものとして賞すべきであらう。辭書史上から見ても決して無意義では無かつたのだ。こゝで序を以て例の元祿太平記が貝原父子の書を何と批判して居るかを檢すると卷六「皆歴々の作なり」の條に左の如くに云つて居るのである。

近年和國の故事に骨を折り、和書を數多述らるゝ人は、松下見林、貝原篤信、同好古なり。是等は何れも博學廣才の人なれども、此君達の作の物、普く世上に用ゐられず、たまゝ賣れぬ書物あるは如何なるゆへぞや。參「されば右の人々博學によつて、其述る所見識一段高し、故に假名書の文と雖も何人のために面白からず、又初學の者は和書を見る事稀に、中より上の學者ならでは其書を見ず、さるによつて好も遠くして賣棄るこそ道理なれ。其中に貝原氏の集められし和爾雅、歲時記、和漢事始、是等は賣易き物なり、八幡本記、諺草、日本釋名、初學知要などは賣遠き物なり……貝原氏の作書の中に、日本釋名は疑はしき事少からず、譬へば雷といふ和訓を、いかりて地に落ると釋せられしは、心元なし。其怒といふ詞の出所は、源何によつて起りたるぞや。電元より形なし、怒て落るやら、悦びて落るやら、其心なければ辨へ難し。暫く考ふるに、論語鄉黨の篇迅雷の註に、敬天之怒と朱晦庵の説によつて、斯様に釋せしならん。又倭の訓を山背に對して述べし事、入程なる説なり。其外疑ひ多けれど、繁ければさらに覺えず。諺草も亦信じ難し。

初學の者は和書を見る事がまれであると言つて居るのは、現在の日で見ると不思議に感ぜられるのである。

本草(藥物)關係の書で辭書體のものは本草辭書であり、醫學關係の書で辭書體のものは醫學辭書である。しかして

今日の植物學、動物學、礦物學と云ふと其れ／＼學問として獨立して居るが、昔の本草學は醫學の一部門であつたのだから、本草辭書はまた醫學辭書の一部である、さて其の本草辭書は普通は本草學獨特の分類——便宜上本草式分類と云ふ。これに詳簡の差はある——を採用するもので、其の分類は辭書としては、今日よりの日から見れば不完全であるために、本草式分類の本草書は、辭書と認めないものもあるやうだが、辭書組織として最も不完全な意義分類體は寛大に取り扱ふ可きものと信ずるが故に、自分は本草式分類のものは是れを辭書として扱ふのである。(道春の多識編は、群書一覽も、國語學書目解題も、國書解題も、皆辭書と見て居る。多識論を辭書と見る以上は、これに類したものを、辭書に非ずと認める事は出来ない筈である) さて此の種の本草醫學辭書としては、先づ病名彙解七卷貞享三年二月他序の刊かは、病名を色葉順で舉げて片假字文で説明したもの、著者は「江南草醫 桂洲市」である。藥種目錄一卷貞享四年六月刊、は五百九十一種の藥種の色葉分類説明書、本朝食鑑十二卷は食用醫用の動食礦物其の他を漢名によつて本草式分類に従うて舉げ、藥物學の立場から漢文で説明したもの、食鑑とは云ひ乍らも、食ひ得るものゝみを扱うたのでは無い。たとへば火部の如きは其れである。なほ外用の藥物の如きも無論食品では無い。著者は人見(小野氏)必大、幕府の醫官であつた。本書は三十年の苦心の産物として元祿五壬申年に成り菊月の白序あり 十年六月に刊行せられた。次ぎに「圖本草和解」七卷四冊横小は元祿十丁丑年八月の大江願軒片仙の序があるが其れによると名醫曲直瀬道三編するところの靈寶藥性能毒の衍を削り、缺を補ひて増補し、圖繪を加へたものである。藥物を色葉順で舉げて、異名・和名・氣味・修治などを片假字文で記して居る。元祿十年八月の刊行である。「圖和語本草綱目」二十三卷十冊元祿十一年二月他序同三月刊、片假は岡本一抱子の撰、大和本草十六卷寶永五年六月白序、六年八月刊、片假字文は貝原益軒の撰、別に附録もある。これらの二書は李時

珍の本草綱目の亞流書であるが、組織から云へば辭書體であると認めねばならぬから擧げるのである。此の期の本草書で自分が特に興味を感じるものは、「重編本草和名」寫本一冊である。寶永六己丑年六月下旬の「山願子山（和）」の漢文自序によると、曾祖父如見子先生が本草式分類で本草和名私記若干卷を著はして置いたのを、山願が伊呂波分としたものである。藥物名の字音の語頭音により色葉分類し、和名を擧げ漢文で説明して居る。しかして本書について自分が興味を感じると云ふのは、源順和名抄、康賴和名集、本草和名、新撰字鏡、萬葉集、延喜式、日本紀などの古い國書を引用して居るからであつて、特に、深根輔仁の本草和名や昌住の新撰字鏡を引いて居るのは、此の二書の流布が極めて希であつた筈であると考へられる時代の事であるから、兩書の流布史から云つても、此の重編本草和名は重視すべきものである。自分の見る本は四六版位の厚冊であるが、著者の子の田菊泉の清書した本である。田山願の事は知らぬが田と云ふは吉田氏であり、如見子は、或ひは幕府の醫官吉田宗達（角倉了以の甥）の事ではあるまいか。

宗教關係の辭書は宗教辭書と呼び得る。先づ神道の方には神道名目類聚抄六卷三冊がある。神道關係の名目を意義分類式に類聚して、平易に片假字文で説明し圖示したもので、神道の通俗百科辭書と云つて可い。元祿十二年六月の自序があり、十五年正月の刊行で、著者は「城西野殿某」とあり、神道書目集は足田以正の著とするもの、如くである。此の書は佐伯有義氏の翻刻本があるから、其れには著者に關する研究が見えるかも知れない。次ぎに佛教關係のものでは、佛像圖彙（また佛神靈像圖彙）三卷は、佛・菩薩・諸天、天竺・震旦・朝鮮・日本の高僧、日域諸神の像、また道具などを類聚して圖示したもの、漢文や片假字文で説明して居る。元祿三年七月の念賢の序、八月の指月軒義

山の跋文はあるが、著者を云はない。此の本よく行はれ、再刻本もあるが後に紀秀信の増補本も出た。其れは天明三年八月の自序文があり寛政四年に刊行せられて居る。隨有軒淨恵の釋教題林和歌集八卷元祿八年五月自序刊は、佛敎關係の歌を代々の選集や家集より抄出して意義類聚したもののだが、意義分類式釋教歌辭書と云ひ得る。後水尾天皇第八皇子妙法院堯恕法親王は、支那の高僧傳四十八部の人名を脚字により韻順に排列した僧名索引略傳を八年かゝりて作られた。附す。其れが僧傳排韻であつて百八卷ある、延寶八年五月の御自序があり、同年十二月の刊行だが、是れに類したものが殆んど同時に出来て居る。其は曹洞宗の兎全が延寶四年より貞享二年十二月までかゝつて作つた僧譜冠字韻類百五十卷(他に附録的なもの十四卷ある)であつて、堯恕のが脚字によつて居るのに反し、これは頭字(冠字)によつて居る。期せずして似たものが出たのは面白い事である。元祿元戊辰十二月の開版である。さて、金言俚言辭書の中で述べた句雙紙の類が、やはり佛敎辭書であるのは云ふまでも無いことである。

特定の書に出て居る漢字漢語の音義を説明したものは所謂音義で、これは何々音・何々音訓・何々音義などの名を與へられて居るが、これらは、順序が部首式であるものは勿論のこと、本文順であつても辭書と見なすべきである。此の種のもは支那に於いては内外典ともに存したが、本邦に於いては内典のものゝみが存し、儒書の音義は存せない。しかして國書の方では、日本紀私記や源氏物語の註釋類(但し語句の註を云ふ)が古くより出て居る。これらは音義の名は無いが、音義に準すべきものである。しかして室町期の末頃に成ると、日本紀音義や太平記音義など、云ふものも出るのである。さて徳川期に成ると、特定の書の單字熟語、成句を抄出して其れに簡單な註を施したものが

出来て来る。例へば四書字引・文選字引の類であるが、明治に成つても、十八史略、日本外史などの單語註釋書が作られ、現在の中小學生用教科書虎の巻類と成つて居る、是れらも亦音義と見なしてよい。斯う云ふ類のものは徳川期には澤山出て居るが、元祿期のものとしては、「増補四書字引」一冊種小本、元祿九、「増補經書字辨」二卷一冊種小本、元祿十年丁丑秋自序、がある。前者は四書の文字を、全畫數によりて一畫より二十九畫までに分類して片假字で註したもの、後者は單字・熟字・成句を字彙式に畫數順で並べて片假字で解釋して居る。何れも簡單なものだが、これも辭書の一類であることに於いて變りが無いから、記し添へるのである。後者に説明用の簡單な挿畫が、數個存するのは、一寸注意するに足る。四書字引の方は増補とあるので、すでに以前にも存した事が判るが、經書字辨も、經學拔錦國字解の名で、文化五年に改正翻刻本が出て居る。寛政八年頃の版もあるらしい(大阪出版書籍目録) 童蒙用として歡迎せられたからであらう。

さて以上で元祿期の辭書界を一瞥したつもりである。自分の見たものを述べた、めに、かなり主要なものであつて漏れたものも有るであらう。其れらは他日補ふ所存である。

要するに元祿期の辭書界は、文運復興期であつた割合から云へば、案外にも徳川期の代表作と稱せられる程のものは殆んど無いのである。しかして此の期の代表的な物と云へば、毛利貞齋の増續大廣益會玉篇(畫引辭書)、貝原好古の和爾雅(意義分類辭書)、諺草(諺語俗語辭書)、槇島昭武の増補和漢合類大節用集(節用集の異體)、荒木田盛員の鸚鵡抄(色葉分類古語辭書)、撰者不詳の蜺縮涼鼓集(ジズズ假字遣辭書)、貝原益軒の日本釋名(語原辭書)、中村義竹・岡谷義端の草露貴珠(草書辭書)などであらう。鴨長尋の倭字(五十音類聚日本紀古訓辭書)、田山願の重編本草和名(色

葉類聚本草辭書」、貞齋の四章附新編類字箋解(意義分類書)は歴史的な價值がある。著者から云へば貞原父子、毛利貞

齋を挙げなければならぬ。但し是れら以外の辭書類が無視せられてよいと云ふのでは決して無い。いかなる辭書であつても——これは辭書に限つた事では無いが——其の書の質や量、また流布の程度に應じて學術的價值、實用的價

値、歴史的價值が、其れゝ多少ともに存する事は云ふまでも無いからである。なほ大和詞の世話盡や、寫本の世話字考の如きは貧弱であるにしても、元祿期の俗語を挙げ、或いは漢字に音訓註を施して居るのであつて、其れらの中には元祿期の俗語(純粹の國語もあれば字音語もある)や、元祿期に於ける珍しい用字などを示すものもあるから、元祿期の言葉を研究する材料としては大切なものである事を忘れてはならないのである。(昭和十一年六月十一日稿)

此の小篇を脱稿した後で、藤井乙男先生が近頃入手せられた珍しい誹諧用語の節用集を見せて頂いた。誹諧用語の言葉即ち誹言を集め色葉類聚し、各部の中をさらに意義分類したものに、全く節用集と同じ組織である。題箋は「三才節用集」であるが内題は「三才全書誹林節用集」で、小本八卷五冊、元祿庚辰春三月他序あり、元祿十三庚辰春三月の刊行、著者は白梅園鶯水。俳書解説にも見えない書である。次ぎに康熙字典の輸入期については石川鴻齋が「至享保元文之際始傳字典」と云つて居るが、はつきりした事は判らなかつたと、今度刊行せられた「享保以後大阪出版書籍目録」を見ると、享保二十年四月に、大阪の書肆が出版の出願をして居る事により、かなり限定的に成つた字典が出来て二十年目である。刊行せられたか何うかは判らぬが、都賀庭鍾本より四十三年早い。享保二十年より十五年後の寛延三年十一月には字典節用集が出願せられ、これは刊行せられて居る。(七月十七日補記)

「好色一代男」試論

賴 桃 三 郎

1

59

天和二年、西鶴の小説處女作として、元祿期町人の小説「浮世草子」の第一石として投ぜられた「好色一代男」の文學史的地位意義に關しては今更こゝに繰返す必要はないであらう。單に文藝界のみに就ても、小説の形態としては假名草子一聯の先行を有し、町人生活その思想自體の新時代的產物としては評判記を中心とする内容的先行者を多く輩出してゐた状態にあつて、この小説の出現した事は何等の偶然でなく、社會的に、文學史的に「元祿時代」煥發の一現象にすぎない。その意味に於て、江戸時代初期、封建制の漸次確立の一途を進るに伴ふて町人の財制制覇の準備時代、中世的舊要素の排除が先づ思想的當面の問題であつた上方第一期、これに續いて寛文延寶のころより町人の財的充實によつて武家に對抗しつゝ、自己の文化層に擾亂の華を咲かせた上方第二期即ち廣義の元祿期、この二つの交流期の產物として、社會情勢の反映物として「一代男」の包含する意味は極めて廣く重大である。そこには新時代に於て確立すべき諸傾向があらゆる面にわたり敏感に表現せられて居ると同時に、創成期的先驅的の要素も亦多分に發見せられる。